言語獲得支援論に関する一考察
―母子遊び「いないいないばー」をめぐる保護者の意識調査を中心に―

今井　康晴
（2012 年 2 月 10 日受理）

A Study of Language Acquisition Support Theory
―Based on a Parental Survey of Peek-a-Boo―

Yasuharu IMAI

This paper of purpose is conduct on the “Peek-a-boo” and picture-book “Peek-a-boo” from the consciousness of parents. “Peek-a-boo” can be mentioned as an important play. This is because “Peek-a-boo” the play enables the communication of parent and child. Communication with parents has a significant influence on language acquisition and development of children. In addition, the communication is regarded as the basics to issue words in language acquisition. “Peek-a-boo” is not intended to be limited to the play, widely used as a picture book. The study focuses on the state of “Peek-a-boo” play to help promote communication and language acquisition based on these. Survey was carried out to the parent for the “Peek-a-boo” and. Aims to this paper the significance of play as a support for parent-child communication and language acquisition “Peek-a-boo”.

Key words: Language acquisition support, Play, Peek-a-boo, picture-book

キーワード：言語獲得支援，遊び，いないいないばー，絵本

はじめに

乳幼児における重要な発達課題として言語獲得が挙げられる。一般的に，ヒトは生後 2 ～ 3 か月頃からアーウー，エウー，クーなど母音を主としたクーイングからダァダァ，バブバブなど子音を含んだバブリングとされる声を出し始め，6 ヶ月以降，喃語を話すようになる。そして 1 歳頃になりマンマ，ワンワンといった意図を持った喃語など，伝えようという意図を持った音，ジャルゴンを発するようになる。こうした前言語は，自然発生的に発せられるのではなく，発達段階に呼応した音声を乳幼児が自ら組み合わせることが示されている（遠矢浩一，1998）。

言語獲得にいたるまでの環境的要素は，例えば野生児の研究に代表されるように，ヒトに養育されなかった子どもの言語使用の傾向として示唆される。前言語期における子どもは，大人との言語的なやりとりや，テレビを見たり絵本を読み聞かせられたりする中で言語を獲得し，主に母子とのコミュニケーションや遊び経験を積み重ねることで達成することを示している（柏木恵子，1978）。すなわち，親，保護者，ヒトがもつ顕著な特徴である言語使用は，他者との相互作用によって達成されるため，乳幼児から幼児期にかけてのコミュニケーションは言語獲得に重要な意義をもっている（Bates, Bretherton, Snyder, 1991; Bloom, 1993）。

また，秦野悦子（2000）の研究で示されるように，幼稚園や保育園の巡回相談の相談内容で最も多いのは言葉，言語に関する相談内容である。これは，幼稚園，保育園における養育や教育現場において言語理解とその獲得が課題であることを示している。同時に言語は，コミュニケーションツールとしての役割だけでなく，認知，認識あるいは思考といった内的機能とも密接に関わっているからである。さらに，発達特性の問題を含め，言語獲得においては何らかの形で大人とのコミュニケーションが，言葉を発する基礎となり，また母親の言動が，乳幼児の行動や言葉の発達の支援として重要な影響をもつと考えられる。

母親と乳幼児の関わりに着目すると，遊びや絵本の読み聞かせなどの活動が指摘され，特に交流遊びのなかでは「いないいないばー」が一般的な遊びとして支

持される。また「いないいないばー」は遊びに限定されるものではなく，絵本としても 1967 年の松谷みよ子（文）・瀬川康男（絵）『いないいないばあ』の初版から今日に至るまで約 90 冊近く出版されている（福岡貞子他，2004）。

さて，Parrott ら（1989）の「いないいないばー」の研究では「いないいないばー」における喜びの要因は，乳児が人の表象を維持し，「人の永続性（見えなくても存在しつづけていることがわかるかどうか）」を理解しているため，同じ場所から隠れた人と同じ人が現れることを期待し，その期待が実現されることによって喜びや笑いが生じるとした。

また野村床吾（1980）によれば，乳幼児における言語発達に関して，喃語，意味を共感・共鳴することによって，周囲の環境との融合から動作や情況を共有する状態へと発達し，他者に何かを伝えるのではなく，他者と何かを共有する楽しさとして捉えられている。

このような母子間におけるコミュニケーションの形態としての「いないいないばー」は，親が乳児の発声に続いて応答する際に，会話とは異なる応答の方法として指摘され，後の子どもの言語理解や言語獲得を支援する「足場かけ（scaffolding）」として強調される。つまり，「いないいないばー」が，単に遊びに留まらず絵本としても普及している要因としては，子どもの楽しさと同時に，前言語コミュニケーションから言語コミュニケーションへと導く思考の発達形成に重要な役割を果たすことが指摘される。

これらをふまえ本研究では，言語獲得を促し支援するコミュニケーションや遊びの在り方として「いないいないばー」に焦点をあてた。「いないいないばー」が，家庭内に留まらず，保育実践においても用いられるほど象徴的な遊びの形態であることをふまえ，保護者はどのような目的で「いないいないばー」遊びを行っているかについて，「いないいないばー」に対するアンケート調査を行い，親子コミュニケーションや言語支援としての「いないいないばー」遊びの意義を考察することを目的とした。

1．先行研究の概観

「いないいないばー」における先行研究では，主に「いないいないばー」の構造や意義について検討されている。布施佐代子（1997）は，「共感的な遊び」として「いないいないばー」遊びを用い，遊びを通して能動的に遊び，保育者や他児との関わりをもつ過程と，それを支え促す保育者の働きかけの在り方に関して分析した。はじめ保育者による「いないいないばー」の意味づけを行い，布をかけて「いないいないばー」遊びを行うなかで，子どもが「ばー」の時の共感することへの期待がみられた。そして指人形を用いた「いないいないばー」においては，保育者の働きかけを取り入れ楽しさを求める力の育ちを示し，保育者からの遊びかけによって，子ども自身が楽しむ力をつけることが大切であると指摘した。

「いないいないばー」における喜びと発達段階の相互関係では，伊藤良子（1987，1988，1991）は，母親との「いないいないばー」遊びを縦断的に観察した。伊藤の場合，「いないいない」動作をする際に，手とタオルの異なった方法で行い，乳児の反応として手の場合の期待感とタオルの場合の期待感の差異を強調した。伊藤は「いないいないばー」遊びでの，母親が出てくる期待感によって喜びを感じているのであり，「いないいないばー」における大人とのやりとりのなかで，ものの永続性の理解と同時に，子どもと親しい大人との情動的な交流の遊びとしても捉えている。これらをふまえると「いないいないばー」遊びを媒介とし，「ばー」と言った時の共感し合うことによって，大人との情動的な結びつきが成立すると考えられる。

「いないいないばー」絵本に対する研究では，福岡ら（2004）の保育者の意識調査では，「いないいないばー」絵本は，ゲーム性を含んだ絵本であるため，保育者にとって人気が高いことを示しているものの，子どもの楽しさを意識するのみで，発達に応じた絵本として熟慮されていないことを示唆した。また絵本「いないいないばー」が，単に絵本を通した「いないいないばー」遊びということに留まらず，子どもが初めて出合う絵本としての位置づけを強調した。

「いないいないばー」は，母子間の共感性やコミュニケーションの達成のみならず，言語獲得援助としての側面も重視されている。ブルーナーは，「いないいないばー」を母子間における「足場かけ」の一例としてあげ，コミュニケーションから言語獲得支援にいたるまでの効果を強調した。ブルーナーは母子間コミュニケーションの過程で，言語能力の獲得が独立した形で習得されるものとして考えてはおらず，発達や環境との相互作用において言語獲得を達成し，経験や教育の在り方により言語獲得が早められることを示唆した（Bruner, 1983, p.17-20）。したがって，ブルーナーは，母子間におけるコミュニケーションの在り方として，お互いの意思疎通を可能にし，言語獲得の基礎を成すフォーマットの存在を強調した。また，ブルーナーは，フォーマットによる大人の制御を活用した言語獲得論として，言語獲得援助システム（Language Acquisition Support System, 以後 LASS）を提案した。

その際に「いないいないばー」は，LASS が機能する具体的な場面として強調された。「いないいないばー」は，表層構造（物を使って消失と再現との時間や動作の変化，発話の変化，消失する物の変化）と深層構造（スクリーン，布，などによる消失と再現の時間や動作）とによって構成され，一連の「いないいないばー」遊び自体が言語のようなものとしてブルーナーは重視した(Bruner, 1983, p.48-49)。つまり，ブルーナーによれば，「いないいないばー」遊びの中の行為や発話の意味づけ，言語交換，ルールの理解などを通して言語による意味の認識を可能にする有効な言語獲得方法として位置づけるのであった。

このように「いないいないばー」遊びは，母子間の有効なコミュニケーションであると同時に，言語獲得への「足場」やフォーマットとしての可能性を有している。これらをふまえ，「いないいないばー」の意義をお試し保育を利用する保護者を対象に，「いないいないばー」の意識調査を行った。

2．方　法

武蔵野短期大学附属幼稚園における「お城フェスタ（お試し保育）」に参加した保護者を対象に「いないいないばー」に関するアンケート調査を実施した。調査時期は平成 23 年 6 月。調査内容は，0 ～ 2 歳児の保護者を対象に「いないいないばー」遊びおよび『いないいないばー』絵本の使用頻度，留意点などを中心に調査した。また自由記述解答による「いないいないばー」遊びと『いないいないばー』絵本に対する意義やイメージなどについて調査した。

3．結果と考察

（1）アンケート結果と考察

アンケート回答数は 27 人で，保護者の年齢は 20 代が全体の 11%，30 代が 88%，無回答が 1% であった。回答者の 27 人すべてが「いないいないばー」遊びを行った経験があり，その頻度は，毎日という回答が 11 人（41%），週に 1 ～ 2 回という回答が 3 人（11%），週に 3 ～ 4 回という回答が 10 人（37%），月に 1 ～ 3 回が 1 人（3%），月に 3 ～ 5 回が 1 人（4%），無回答が 1 人（3%）であった。（図 1）

次に保護者が「いないいないばー」遊びに対する意識について，楽しさ，コミュニケーション，ことばの習得，その他の設問を設け回答を求めた。この設問では回答者から単数または複数回答が得られた。その傾向をみると，「楽しさ」，「コミュニケーション」という回答が 9 割を占めた。対照的に，言語獲得や練習という意識は 1 割に留まった。（図 2）

次に『いないいないばー』絵本の使用に関しては，18 人(66%)が使用したことがあると回答し，9 人(33%)は使用したことがないという回答であった。使用頻度については，週に 1 ～ 2 回が 8 人（44%），週に 3 ～ 4 回が 5 人（28%），月に 1 ～ 3 回が 2 人（11%），月に 3 ～ 5 回が 2 人（11%）であった。（図 3）『いないいないばー』絵本の読み聞かせへの留意点は，単数または複数回答が得られ，その傾向として，「絵本そのものの楽しさ」，「子どもとのコミュニケーション」という回答が 8 割を占めた。（図 4）

（2）「いないいないばー」遊びおよび『いないいないばー』絵本の意義

「いないいないばー」遊びや『いないいないばー』絵本の意義に関する保護者の意見には，熱心かつ興味深い記載がみられた。「いないいないばー」遊びおよび『いないいないばー』絵本の保護者の感想や意見および利点などについて以下のとおりであった。

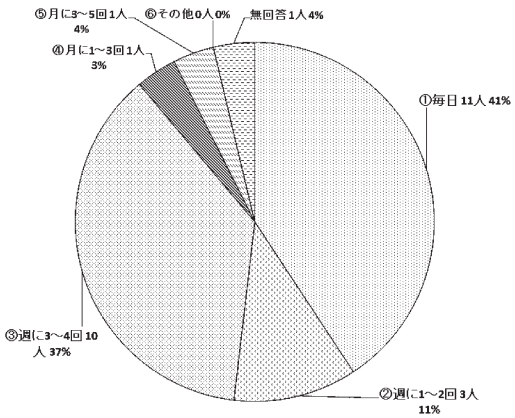

図 1 「いないいないばあ」遊びの頻度

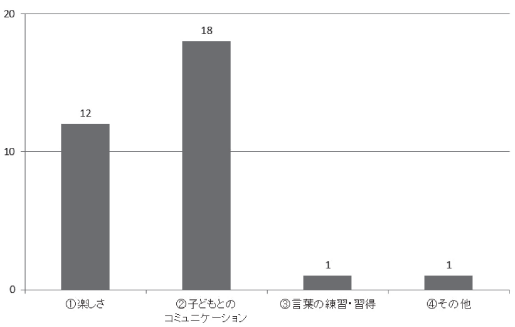

図 2 「いないいないばあ」遊びで意識したこと

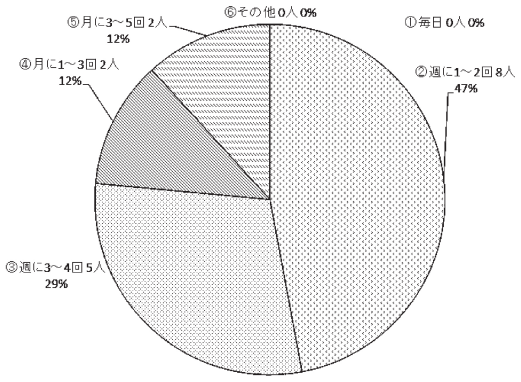

図3 「いないいないばあ」の読み聞せ頻度

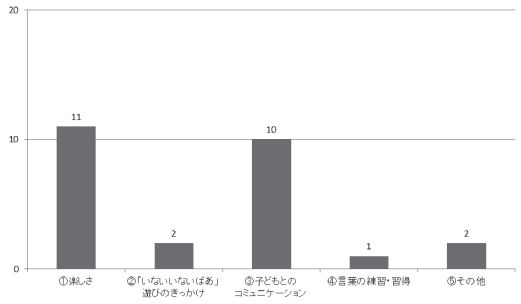

図4 読み聞かせで意識したこと

①コミュニケーションがとれる。
②子どもがすごく笑ってくれて，マネをしたり楽しく遊ぶことが出来たから。
③特別「いないいないばあ」にだけ有意義と感じるわけではありませんが，年配の方は必ず「いないいないばあ」で触れ合われるので，一番回数が多いのかなと思います。子どもがたのしんでいるので良いコミュニケーションだと思う。
④遊び方を真似したり，声を出して読んだり色々なアレンジしたとき喜んでいた。
⑤赤ちゃんとの遊びは何をしてよいかわからなかったが，コミュニケーションはとれてよかった。
⑥コミュニケーションや人のマネをすることで色々覚えていくから。
⑦いないとみえて本当はいるんだよと意識づけをすることで後追いが少なくなったり，不安が少し解消されると保育士さんに聞きました。実際それが有効だったか，どうかはよく分かりませんでした。
⑧いないいないばあでも子どもの笑顔は見られたが，もう少し体を使った遊びの方が笑っていた。
⑨「ばあ」に行くまでのプロセスは色々工夫でき，毎回同じ状況ではないので，子どもも大人も（子どもの反応の違いなど）楽しめ有意義だと思う。
⑩あまり「理由」を考えたことがない。子どもの反応がある程度良かった気がする。
⑪あまり反応のない赤ちゃんにもできるから。
⑫「いないいないばあ」で遊ぶことで良く笑うようになった。
⑬「いないいないばあ」の絵本をきっかけに他の本もよく読むようになった。
⑭小さい子とコミュニケーションをとる第一のものだと思う。
⑮喜ぶから。

（3）「いないいないばー」遊びおよび『いないいないばー』絵本の保護者自身に与える影響

「いないいないばー」遊びおよび『いないいないばー』絵本の保護者自身に与える利点や影響に関して自由記述解答を求め，その結果は以下のとおりであった。

①コミュニケーションがとれる。
②子どもの表情がよく分かるので読み手としては参考になる。
③子どもと向き合って，笑顔で時間を共有できることが読み手にとっても，遊び手にとっても新しい発見をもたらしてくれると思います。
④赤ちゃんとの遊びは何をしてよいかわからなかったし，コミュニケーションもとれてよかった。
⑤喜んでくれる顔を見てこちらも幸せ。
⑥子どもの反応がどうかな？とワクワクしたり，こうしてみようかなとかコミュニケーションや楽しい子育ての一環に有意義だと思います。
⑦聞き手が一人だけで理解したり想像したりするものではなく相補するものなので，子どもと関わるうえでは大切なことだと思う。
⑧自分自身も一緒に楽しめるから。
⑨親もとても楽しいから。

上記の保護者の「いないいないばー」遊びおよび絵本『いないいないばー』の意義に対する意見や感想では，アンケート結果にもあるように，共通して「楽しさ」や「コミュニケーション」という文言が多くみられた。これは，「いないいないばー」遊び，『いないいないばー』絵本を読み聞かせた際の，子どもの良いリアクションを反映しており，子どもの「喜び」を感じられる遊びとして理解できる。また，使用頻度においても，週単位で複数回みられるなど高い人気を示している。

詳細では，子どもの観察やモデリングなど，動作のマネとそれに伴う子どもの笑顔や楽しさの共感が保護者にとって有意義であることが示された。さらに「いないいないばー」をする人を変えることによって，子どものリアクションも異なり，保護者も子どもも楽しむことが出来た，などの意見もあった。特に乳幼児期においては，コミュニケーション方法が未知であり，表情が解ることの利点もあった。

これらをふまえると，「いないいないばー」は乳幼児期の子どもに対するコミュニケーション方法として，他の遊びと比べて比較的にリアクションが良いこと，表情が解ることに，その意義を見出す見解が多かった。子どもと笑顔を共感，共有できることにより，つまり，子どもの心理，思考が読み取るきっかけとしても評価している傾向にある。子育てのなかで必要不可欠な子どもとのコミュニケーションをとるうえで，「いないいないばー」は有効であり，子どものみならず，親として楽しいという点でも有意義であると推測される。また『いないいないばー』絵本の使用から色々な絵本を読むきっかけとなったなどの利点もあげられた。

しかし，「いないいないばー」遊びは全ての保護者が経験しているが，『いないいないばー』絵本の使用に関しては約 30% の保護者が未使用であった。これをふまえると，身振り手振りで出来る遊びから絵本を使用した遊びという展開に，あまり積極的でないことが読み取れる。

まとめ

研究目的である「いないいないばー」遊び，『いないいないばー』絵本に対する意識調査では，肯定的な意見が多数みられ，「いないいないばー」遊びや『いないいないばー』絵本によって保護者は，コミュニケーションと楽しさにその意義を感じ，子どもとの相補的な関わりを評価していることが明確になった。

しかし，研究主題である言語獲得支援としての「いないいないばー」遊び，『いないないばー』絵本の意識は，ほとんどみられなかった。これをふまえると，ブルーナーの見立てにある「いないいないばー」遊びを通したコミュニケーションの形成と同時に，言語獲得に対する足場，つまりフォーマットとしての「いないいないばー」は，保護者には意識されにくい結果となった。つまり，「いないいないばー」は，言語獲得支援としての機能を期待されるよりも，コミュニケーション機能としての意識や意義が高いことが明らかになった。

再度，「足場かけ」のコンセプトを検討すると，「足場かけ」は，他者との共同において能力の飛躍的向上を図る概念である。それは特に言語獲得において，保護者からの何らかの援助がない限りは言語獲得が困難であることから，コミュニケーションやゲームにおけるフォーマットという援助概念が提案された。ブルーナーによれば，「いないいないばー」などのゲーム遊びは，「生活形式」に即した形で提供され，ゲームそれ自体がフォーマットであり，フォーマットが「言語のようなもの」として系統的に与えられることを重視した（Bruner, 1983, p.53-55）。

これらをふまえるとアンケート結果から 2 つの観点が指摘される。一つは「いないいないばー」それ自体がコミュニケーションとして必要であることは保護者の回答，あるいはブルーナーの「足場かけ」からもその重要性は認識される。しかし，アンケートの結果では，保護者は言語獲得という目的，意義において「いないいないばー」を行っていないため，保護者の意識に関わらず，コミュニケーションと同時に，子ども自身が，「いないいないばー」遊びの中からフォーマットを読み取って理解していることが予想される。

もう一つは，「いないいないばー」遊びそれ自体に，保護者と子どもが喜び，楽しさ，といった「機能的悦楽（funktionslust）」体験をしている。すなわち，保護者のコミュニケーションに対する意識を，子どもたちは相互交渉的なゲームのなかで，保護者の指示を共有，変換することによって，言語獲得の一助となっているのではないか。よって，保護者は「いないいないばー」遊びが言語獲得における主要な契機とは意識していなくとも，コミュニケーションによる楽しさが，子どもの学びにも適用され得るのである。

言語獲得論では，当然のように幼児の言語教育という客観主義的，機能主義的と結びつき，これが乳幼児への早期教育へとつながる可能性が生じる。しかし，「いないいないばー」遊びや『いないいないばー』絵本での身振り手振りには，佐藤学（1997）が提唱する「学びの身体技法」への応用も予想され，同時に絵本の読み聞かせのあり方から，保護者自身も学び育つ関係性もある。そこに保護者の意識として，言語の発声・喃語や言葉の早期訓練を目的とするのではなく，意味を求める学びの主体として「いないいないばー」にある足場かけが見出せるのである。

それは，保護者にとって足場となる「いないいないばー」遊びや「いないいないばあ」絵本の読み聞かせの活動として，その可能性が問われるものとなるであろう。

参考文献

阿部五月　田中規子　藤永保（2002）「発達初期の理解語彙の獲得（Ⅱ）― 家庭訪問調査（１）―」『発達研究』第 16 巻　15-31 頁

阿部五月　田中規子　藤永保（2003）「発達初期の理解語彙の獲得（Ⅱ）― 家庭訪問調査（２）―」『発達研究』第 17 巻　147-167 頁

阿部五月　田中規子　藤永保（2004）「発達初期の理解語彙の獲得（Ⅱ）― 家庭訪問調査（３）―」『発達研究』第 18 巻　97-113 頁

Bates, E. , Bretherton, I. , & Snyder, L. (1991) From First Words to Grammar. NY: Cambridge University Press.

Bloom, L. (1993) The Transition from Infancy to Language. Cambridge University Press.

Bruner, J. (1983) Child's Talk : Learning to use Language, W・W・Norton&Company・New York・London.

福岡貞子，吉田ちず子，阪上節子，大方美香，池川正也（2004）「『いないいないばあ』絵本の一考察」『四條畷学園短期大学研究論集第 37 号』61-71 頁

布施佐代子（1997）「0 歳児保育におけるいないいないばあ遊びの発達」日本保育学会大会研究論文集（50），1040-1041 頁

秦野悦子（2000）「会話の難しい幼児たち」『言語 29』22-29 頁

伊藤良子（1987）「乳児におけるイナイイナイバー遊びの発達と永続性との関係」『東京学芸大学特殊教育施設報告』36　pp.83-90

伊藤良子（1988）「イナイナイバー遊びの発達に関する縦断的研究」『東京学芸大学特殊教育施設報告』37　pp.95-101

伊藤良子（1991）「いないいないばあ」はなぜ面白いのか　山崎愛世・心理科学研究会『遊びの発達心理学　保育実践と発達研究をむすぶ』萌文社

柏木恵子（1978）『発達心理学入門 ― 子どもの発達・学習・社会化 ―』有斐閣　15-19 頁

野村庄吾（1980）『乳幼児の世界』岩波新書

小林晴美　佐々木正人（編）『子どもたちの言語獲得』大修館書店

Parrott, W. G. & Gleitman, H. (1989) Infants' Expectations in Play : The Joy of Peek-a boo. In C. E. Izard (Ed.), Developmet of Emotion-Cognition Relations. Lawrence Erlbaum Associates Ltd. pp.291-311.

佐藤学（1997）『学びの身体技法』太郎次郎社

田中規子　藤永保　阿部五月（2001）「発達初期の理解語彙の獲得（Ⅰ）― 質問紙調査（１）―」『発達研究』第 16 巻　1-14 頁

田中規子　阿部五月　藤永保（2003）「発達初期の理解語彙の獲得（Ⅰ）― 質問紙調査（２）―」『発達研究』第 17 巻　129-145 頁

遠矢浩一（1998）「擬態・擬音語とからだ」秦野悦子　やまだようこ編『コミュニケーションという謎』ミネルヴァ書房　3-31 頁

戸田須恵子（2005）「乳児の言語獲得と発達に関する研究」『北海道教育大学釧路校研究紀要』第 37 号　101-108 頁

参　考

「いないいないばあ」についてのアンケートのお願い

このたび武蔵野短期大学幼児教育学科では、幼児教育の向上を目指し附属幼稚園と連携して、乳幼児を抱える保護者の皆様の現状調査を行うことになりました。今回の調査内容は、乳幼児と保護者のコミュニケーションや日常生活の一場面である遊び「いないいないばあ」と絵本『いないいないばあ』に関してのアンケートによる保護者の意識調査です。これまで保育者の立場から「いないいないばあ」が分析され、発達初期における言語理解や共同注意などの成果が得られておりますが、このアンケートでは、乳幼児期のことばの発達段階での「遊び」としての効果を探ると共に、保護者の皆様の「いないいないばあ」に対するイメージ等を調査することを目的としております。

武蔵野短期大学幼児教育学科　助教
今井 康晴

回答者の年齢	（　　）歳	回答者の性別	男　・　女
お子さんの年齢	（　　）歳	お子さんの性別	男　・　女

各設問での回答は、該当の番号に○をつけて回答をお願いいたします。

設問Ⅰ．遊び「いないいないばあ」について

1．これまでに、家庭でお子さんと「いないいないばあ」をして遊んだことはありますか。
　① はい　　② いいえ
※「はい」の方は2．へ、「いいえ」の方は4ページ設問Ⅳから回答をお願いします。

2．「はい」と回答された方にお尋ねします。「いないいないばあ」はどなたがお子さんとよく遊びましたか。

　① 父親　　② 母親　　③ 父親と母親の交替で
　④ 祖父母　　⑤ 親類や友人知人
　⑥ その他［どのようなご関係ですか：　　］

3．それはだいたいお子さんが何歳くらいの時によく遊んでいましたか。

　① 0歳から～1歳　　② 1歳～2歳　　③ 2歳～3歳　　④ 4歳以降

4．どのくらいの頻度で「いないいないばあ」をして遊びましたか。

　① 毎日　　② 週に1～2回　　③ 週に3～4回
　④ 月に1～3回　⑤ 月に3～5回　⑥ その他［　　］

5．お子さんと「いないいないばあ」の遊びをした時、どのようなことを心がけましたか。

　① 楽しさ　　② お子さんとのコミュニケーション
　③ 子どものことばの練習や習得を意識して　　④ その他［　　］

設問Ⅱ．絵本『いないいないばあ』について

1．絵本『いないいないばあ』を使って、「いないいないばあ」遊びをしたことはありますか。

① はい　　② いいえ

※「はい」の方は２．へ、「いいえ」の方は４ページ設問Ⅳから回答をお願いします。

２．「はい」と回答された方にお尋ねします。どのような絵本を使用しましたか、絵本の題名、作者名、出版社などわかる範囲でお答えください。

（　　）

３．絵本『いないいないばあ』の読み聞かせはどなたが行いましたか。

① 父親　　② 母親　　③ 父親と母親の交替で
④ 祖父母　　⑤ 親類や友人知人
⑥ その他［どのようなご関係ですか：　　］

４．それはだいたいお子さんが何歳くらいの時に読み聞かせを行っていましたか。

① ０歳から～1 歳　　② １歳～２歳　　③ ２歳～３歳　　④ ４歳以降

５．どのくらいの頻度で絵本『いないいないばあ』の読み聞かせを行いましたか。

① 毎日　　② 週に１～２回　　③ 週に３～４回
④ 月に１～３回　⑤ 月に３～５回　⑥ その他［　　］

６．絵本の『いないいないばあ』を読み聞かせた時、どのようなことを心がけましたか。

① 絵本そのものの楽しさ　　② 「いないないばあ」で遊ぶためのきっかけとして
③ お子さんとのコミュニケーション　　④ 子どものことばの練習や習得を意識して
⑤ その他［　　］

設問Ⅲ．遊び「いないいないばあ」及び絵本『いないいないばあ』について

１．「いないいないばあ」で遊ぶことと絵本『いないいないばあ』の読み聞かせ、お子さんに対してどちらを頻繁に行いましたか。

① 「いないいないばあ」での遊び　　② 絵本『いないいないばあ』の読み聞かせ
③ 遊び・読み聞かせどちらも同じくらい　　④ 特には意識しなかった

２．お子さんの反応はどちらがよかったですか。またその理由をお気づきの範囲でお聞かせください。

① 遊び「いないいないばあ」　　② 絵本『いないいないばあ』の読み聞かせ
③ どちらも同じくらい反応が良かった　　④ その時々で反応が違った
理由（　　）

3．遊び「いないいないばあ」及び絵本『いないいないばあ』と同じような頻度で行った遊び、あるいは読み聞かせた絵本がありましたら教えてください。

遊びの場合はその内容を、読み聞かせた絵本の場合はその本の書名などをご紹介下さい。

（　　）

4．「いないいないばあ」で遊ぶことや絵本『いないいないばあ』の読み聞かせを行うことは、家庭でのお子さんと触れ合うなかで、非常に有意義なものであると感じますか。

① 非常に感じる　② ある程度は感じる　③ どちらともいえない
④ それほど有意義だとは感じない　⑤ まったく有意義には感じない

5．どのような理由でそのように感じられましたか。その意見をお聞かせください。

（　　）

6．お子さんと「いないいないばあ」で遊ぶことや絵本『いないいないばあ』の読み聞かせは、読み手自身に有意義であると考えますか。

① はい　② いいえ　③ わからない

7．「はい」と回答された方にお尋ねします。どのような理由で有意義であるとお考えですか。意見をお聞かせください。

（　　）

8．「いいえ」と回答された方にお尋ねします。どのような理由で有意義ではないとお考えですか。意見をお聞かせください。

（　　）

9．絵本を使わずに、身振りだけの「いないいないばあ」で十分だとお考えになりますか。その理由もお書きください。

① 十分である　② 絵本を用いた方がよい　③ どちらでもよい

理由（　　）

設問Ⅳ．遊び「いないいないばあ」を行わなかった、『いないいないばあ』絵本を使わなかった方にお尋ねします。

１．「いないいないばあ」をしなかったのはどのようなお考えからですか。

① 知らなかった　② 興味がなかった　③ 子どもの反応が良くなかった
④ 子どもの反応のよい遊びを行った

２．お子さんと頻繁に行った遊び、あるいは読み聞かせた絵本がありましたらご紹介下さい。

（　　）

ご協力、誠にありがとうございました。